連載―書写が目ざすもの〔9〕

行書のQ&A　その1

山梨大学教授　宮澤（みやざわ）　正明（まさあき）

中学校書写の主たる学習内容は、速書きとしての行書学習ですが、中学一年の一学期では、これまで述べてきた「いわゆる許容の書き方」の楷書を扱って、速書きの素地を学びます。また、楷書に調和する平仮名も扱います。一年の二学期からは行書の基礎・基本を学習し、二年以降では行書に調和する平仮名、漢字と平仮名の調和、そして各種の書式・形式などを学習して、九年間に及ぶ書写の学習の集大成をすることになります。

さて、中学校の書写を担当される先生方から、行書指導に関してさまざまな質問や意見が聞かれますので、今回から、Q&Aの形でこれらの声にお答えしましょう。

Q1　楷書と比べて行書はどこがどう違うのか。また、行書の書き方がよくわからないのだが。

A　行書という書体は、本来その書き方に定型がありません。というのは、点画を連続して書くために、点画の始筆・送筆・終筆、または点画そのものの形に変化が生じるからです。変化するだけでなく、速く書くことを優先するあまり、点画を省略したり、場合によっては筆順さえも変えて書いたりすることが行われます。したがって、楷書に近い書き方もあれば、草書に近い書き方まで幅広くあるのが行書の特徴です。このように、楷書に比べてさまざまな書き方があることから、行書の書き方がわかりにくくなっているのでしょう。

中学校で学習する基礎的・基本的行書は、古来書き継がれてきたさまざまな行書を根底に置きながらも、小学校で学習してきた楷書、および「いわゆる許容の書き方」を踏まえた字形を速書きする方法をとることが、無理のない行書学習となります。

基礎的・基本的行書の特徴をあげてみましょう。

①点画が曲線的になり、字形全体に丸みが生じる（図1）

行書では、点画の始筆は滑り込むような入り方になるので楷書の始筆より穏やかな角度になり、送筆部もやや丸みを帯びます。また、送筆部が「折れ」の場合は、ゆるやかにカーブして方向を変えます。このように、直線的な楷書の点画に対して行書の点画は曲線的になりやすく、字形全体に丸みが生じやすくなります。

図1

②点画の連続1「点画の終筆を変化させる」（図2）

点画の終筆は「止め・はね・払い」の三種です。行書では、次画または次字にすばやく移行する気持ちが、筆記具の「平面運動」や「距離の短縮（近道）」を誘い、終筆の筆使いを変化させます。

例えば、行書の「二」の一画目の終筆は、すばやく二画目の始筆に向かうために左下にはねが生じます（平面運動）。また、「大」の一画目の終筆は二画目の始筆にすばやく向かうために左上にはねます（平面運動）。同じく「大」の二画目の終筆は、完全に払うと大きな円を描いてから三画目の始筆に入ることになるので、払う直前に軽く止めて上にはね出すようになります（近道）。三画目の右払いの終筆は、これも完全に払うと次の文字への時間がかかるので軽く止めにします（近道）。「小」の一画目の終筆は、二画目の点にすばやく移行するあまり、楷書の「はね」より長目になります（平面運動）。二画目の終筆は止めか、右にはねます（近道）。三画目の点は次の文字へのすばやい移行のために左下にはねます。

このように、点画を速く書くと、「平面運動」や「距離の短縮（近道）」によって終筆での変化や連続性が生まれます。これらは、行書の最も基本となる特徴です。

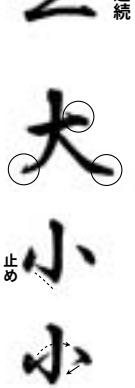

図2

③点画の連続2「直接つなげて一画で書く」（図3）

点画の終筆と次の画の始筆が近くにある場合や接している場合などは、折れて直接連続させることがあります。例えば「先」の一画目の左払いは二画目の横画の始筆と近いので直接つなげます。また、四画目の横画と五画目の左払いは接していることから、横画の終筆と左払いの始筆を直接つないで書いてしまいます。

このように、点画の連続には、②のように終筆を変化させて次画へつなぐ方法もあれば、終筆と次画の始筆をつなげて直接連続する方法もあります。

図3

次回も基礎的・基本的行書の特徴について述べます。